

修士論文 (要旨)

2011年7月

ノートテイキングからみる講義の理解過程  
—講義 DVD 視聴時におけるノートの分析とインタビューの質的分析—

指導 齋藤伸子 先生

言語教育研究科

日本語教育専攻

209J3901

岩下智彦

## 目次

### はじめに

<b>第1章 序論</b> . . . . .	1
1.1 研究の目的と意義 . . . . .	2
1.2 用語の定義と本研究の範囲 . . . . .	2
<b>第2章 先行研究</b> . . . . .	5
2.1 第2言語による講義理解を対象とした研究の概観 . . . . .	6
2.2 講義談話を対象とした研究 . . . . .	9
2.3 聴解に関する研究 . . . . .	11
2.4 ノートテイキングに関する研究 . . . . .	13
<b>第3章 調査概要と分析方法</b> . . . . .	15
3.1 予備調査の概要 . . . . .	15
3.2 本調査概要 . . . . .	16
3.3 分析方法 . . . . .	20
<b>第4章 ノートテイキングと講義理解との関係</b> -どのような語をどれくらいノートテイキングするのか- 【分析1】 . . . . .	23
4.1 調査結果の概要 . . . . .	23
<b>第5章 講義を理解する過程</b> -4名を対象としたインタビューの質的分析- 【分析2】 . . . . .	33
5.1 分析の手順 . . . . .	33
5.2 ノートテイキングストラテジーから見る講義の理解過程 . . . . .	35
<b>第6章 分析結果の統合</b> . . . . .	51
6.1 講義の理解状況 . . . . .	53
6.2 ノートテイキングストラテジー . . . . .	55
<b>第7章 総合的考察</b> . . . . .	64
7.1 本研究で明らかになったこと . . . . .	66
7.2 研究課題との照合 . . . . .	67
7.3 ノートテイキングと講義理解との関係 . . . . .	68

要旨 【キーワード：ノートテイキング，講義，聴解，理解過程，質的研究】

## 第1章 序論

講義は複数の話段によって構成されている（佐久間 2010）。そして、複数の話段によって構成された講義の重層構造を理解することは、留学生にとって困難な課題であることが複数の研究で明らかにされている（田中 2010, 片山 2003, 山下 1999）。こうした現状に際しどのような指導が効果的であるか、その手掛かりとなりうる母語話者による講義の理解過程についても実態解明が不足している（佐久間 2010）。そこで、本研究では、母語話者と留学生を対象とし、講義を聴く際のノートテイキングと講義の理解過程について調査、分析を行った。研究課題は以下の2つである。(1) 留学生及び母語話者が、講義を聴く際、どのようにノートテイキングしているのか。(2) 留学生および母語話者は講義を聴く際、どのような理解過程をたどるのか。以上の2点を明らかにし、本研究の結果を、講義を理解するための聴解指導の一助にとしたい。

## 第2章 先行研究

佐久間（2010）は提題表現と叙述表現からなる「話段」という分析単位を提唱し、講義談話を分析した。その結果、講義は相対的な大小の話段による重層構造によって構成されていることを明らかにした。この話段による重層構造が留学生にとって難しいものであると考えられる。

水田（1996）は、聴解ストラテジーの枠組みを用いて、聴解の際に直面する問題、どのように解決するのかをストラテジーの連鎖の観点から明らかにした。

## 第3章 調査概要と分析方法

調査は3度の予備調査の後、2010年11月から12月に都内大学院の教室を用いて行った。調査協力者は、日本語母語話者4名と留学生9名の計13名であった。留学生の母語は韓国語3名、北京語3名、広東語1名、台湾語1名、ベトナム語1名であった。調査は以下の手順で行われた。1) 32分の講義DVDの視聴、2) 理解度テスト、3) 焦点化インタビュー、4) SPOTであった。DVDを視聴している際にはノートテイキングを許可し、ノートの様子をビデオで撮影した。3) インタビューは、録画したVTRを調査協力者とともに視聴しながら行った。留学生に対しては4) SPOTを実施し、日本語能力についての資料とした。

上記の調査結果に対して2つの分析を行った。分析1は、研究課題(1)を明らかにするため、ノートに書かれた形態素の数および、どのような言葉を書いているのかについて分析した。どのような言葉を書いているのかを分析するにあたり、Thorndyke (1977) の物語文法(story grammar)を用いて講義の主要な内容を抽出し、抽出された主要な情報をどれほど書いているかを分析した。分析2は、研究課題(1)を明らかにするため、理解度テストをクリアした母語話者2名と留学生2名のインタビューの結果に対して定性的コーディング(佐藤 2008)を行った。その結果、以下の3点を明らかにした。1) 講義理解の過程を表す概念である「講義の理解状況」。2) どのような意図をもってノートテイキングを行うのかを表す概念である「ノートテ

イキングストラテジー」。3)「ノートテイキングストラテジー」の観点から見た4名の理解過程。

#### 第4章 ノートテイキングと講義理解との関係

分析1の結果、ノートに書かれた形態素の数は87個から1128個であった。平均値は、265個であった。平均値を境として全体を文字の多少で2群に分けたところ、文字の少ない群は講義の進展に従い記述量が減ることが分かった。一方文字の多い群には顕著な記述量の変化は見られなかった。

#### 第5章 講義を理解する過程

分析2の結果、本調査の調査協力者4名は、【全体像が分からない】【共通点を捉える】【講義の全体像を理解する】という段階を経て講義を理解することが分かった。さらに、32個のノートテイキングストラテジーが抽出された。

#### 第6章 分析結果の統合

分析結果を統合として、ノートテイキングストラテジーを機能に応じて9種に分類した。9種とは、A {情報収集のために書く}、B {話題の転換にともなって書く}、C {重要な点を予測して書く}、D {考えるために書く}、E {既出の内容との関連性を感じて書く}、F {共通点を捉えて書く}、G {講義全体の内容を分かった上でまとめる}、H {講義者の行動に反応して書く}、I {能動的理由により書く}である。

また、抽出されたノートテイキングストラテジーの観点から4名の講義の理解過程を記述した。分析2における対象者4名はノートテイキングストラテジーをそれぞれの方法で使用組み合わせた一方で、母語話者にしか見られなかったストラテジーの連鎖も見られた。

ノートに記述する情報が内包している情報量を、ノートテイキングストラテジーのモニターの範囲の観点から分析した結果、講義が進むにつれて、ノートテイキングする際にモニターする情報の量が多くなっていくことが示唆された。

#### 第7章 総合的考察

本研究の結果、留学生および日母語話者は、9種のノートテイキングストラテジーを用いてもいることが分かった。つまり、本研究の結果から、留学生および日母語話者は、大別すると9つの意図をもってノートを記述しているといえる。

また、どのような質の情報を書いているかという点については、大きく2つの傾向がみられた。講義の要点となる情報を優先的に既述している群と網羅的に講義内容を既述している群の存在が示唆された。

留学生が重層構造を理解するにあたり、第6章で示したモニターする情報量が増加することが困難になる原因であることが考えられる。また、個別の理解過程から、講義序盤は、講義の要点として複数の可能性が浮かんで消えていくが、徐々に要点を絞っていく過程が示唆された。

## 参考文献

- 片山智子 (2003) 「日本語学習者の講義理解 - 何が学生の理解を誤らせるのか - 」  
Polyglossia 7 pp.39 - 52.
- 佐久間まゆみ (2010) 『講義の談話の表現と理解』くろしお出版.
- 平尾得子 (1999) 「講義聴解能力に関する一考察 - 講義聴解の特徴と日本語学習者が抱える問題点 - 」『日本語・日本文化』25号 pp.1 - 21.
- 水田澄子 (1996) 「独話聞き取りにみられる問題処理のストラテジー」『世界の日本語教育』第6号 pp.49 - 63.
- 山下直子 (1999) 「外国人留学生の講義理解 - 理解に影響を与える要因とストラテジーに関する意識調査から - 」『日本語教育』107号 pp.95 - 104.
- 横山紀子 (2002) 「過程」重視の聴解指導の効果 - 対面場面における聴解過程の分析から -  
『第二言語としての日本語習得研究』第8号 pp.44 - 63.